

# 武蔵野

国木田独歩



「武蔵野の俤おもかげは今わずかに入間郡いるまに残れり」と自分は文政年

間にできた地図で見たことがある。そしてその地図に入間郡

こてさしはら

「小手指原久米川は古戦場なり太平記元弘三年五月十一日源平小  
手指原にて戦うこと一日がうちに三十余たび日暮れは平家三里  
退きて久米川に陣を取る明れば源氏久米川の陣へ押寄せると載  
せたるはこのあたりなるべし」と書きこんであるのを讀んだこ  
とがある。自分は武蔵野の跡のわずかに残っている処とは定め  
てこの古戦場あたりではあるまいかと思つて、一度行つてみる  
つもりでいてまだ行かないが実際は今もやはりそのとおりであ  
ろうかと危ぶんでいる。ともかく、画や歌でばかり想像してい  
る武蔵野をその俤ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願

ではあるまい。それほどの武蔵野が今ははたしていかがであるか、自分は詳わしくこの問に答えて自分を満足させたいとの望みを起こしたことはじつに一年前の事であつて、今はますますこの望みが大きくなつてきた。

さてこの望みがはたして自分の力で達せらるるであらうか。自分はできないとはいわぬ。容易でないと信じている、それだけ自分は今の武蔵野に興味を感じている。たぶん同感の人もすくなからぬことと思う。

それで今、すこしくたんちよ端緒をここに開いて、秋から冬へかけての自分の見て感じたところを書いて自分の望みの一少部分を果したい。まず自分がかの問に下すべき答は武蔵野の美び今も昔に劣らずとの一語である。昔の武蔵野は実地見てどんなに美であつたことやら、それは想像にも及ばんほどであつたに相違あるま

いが、自分が今見る武蔵野の美しさはかかる誇張的の断案を下  
さしむるほどに自分を動かしているのである。自分は武蔵野の  
美とといった、美といわんよりむしろ詩趣ししゆといたい、そのほう  
が適切と思われる。

## 二

そこで自分は材料不足のところから自分の日記を種にしてみ  
たい。自分は二十九年の秋の初めから春の初めまで、渋谷村しぶやの  
小さな茅屋ぼうおくに住んでいた。自分がかの望みを起こしたのもその  
時のこと、また秋から冬の事のみを今書くというのもそのわけ  
である。

九〇月七〇日——「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払

いつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるるとき林影一時に煌めく、——」

これが今の武蔵野の秋の初めである。林はまだ夏の緑のそのままでありながら空模様が夏とまったく変わってきて雨雲の南風につれて武蔵野の空低くしきりに雨を送るその晴間には日光水気を帯びてかなたの林に落ちこなたの杜にかがやく。自分  
はしばしば思った、こんな日に武蔵野を大観することができたら  
いかに美しいことだろうかと。二日置いて九日の日記にも「風  
強く秋声野にみつ、浮雲変幻たり」とある。ちょうどこのころ  
はこんな天気が続いて大空と野との景色が間断なく変化して日  
の光は夏らしく雲の色風の音は秋らしくきわめて趣味深く自分  
は感じた。

まずこれを今の武蔵野の秋の発端として、自分は冬の終わる

ころまでの日記を左に並べて、変化の大略と光景の要素とを示しておかんと思う。

九○月○十○九○日——「朝、空曇り風死す、冷霧寒露、虫声しげし、

天地の心なお目さめぬがごとし」

同○二○十○一○日——「秋○天○拭○う○が○ご○と○し、木○葉○火○の○ご○と○く○か○が○や

く

十○月○十○九○日——「月○明○ら○か○に○林○影○黒○し」

同○二○十○五○日——「朝は霧深く、午後は晴る、夜に入りて雲の

絶間の月さゆ。朝まだき霧の晴れぬ間に家を出で野を歩み林

を訪う

同○二○十○六○日——「午後林を訪う。林の奥に座して四顧し、傾

聴し、睇視し、黙想す」

十○一○月○四○日——「天高く気澄む、夕暮に独り風吹く野に立て

ば、天外の富士近く、国境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一点、暮色ようやく到り、林影ようやく遠し」

同十八日——「月を踏んで散歩す、青煙地を這い月光林に碎

く」

同十九日——「天晴れ、風清く、露冷やかなり。満目黄葉の

中緑樹を雑ゆ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。独り歩み黙思

口吟し、足にまかせて近郊をめぐる」

同二十一日——「夜更けぬ、戸外は林をわたる風声ものすご

し。滴声しきりなれども雨はすでに止みたりとおぼし」

同二十三日——「昨夜の風雨にて木葉ほとんど揺落せり。稲

田もほとんど刈り取らる。冬枯の淋しき様となりぬ」

同二十四日——「木葉いまだまったく落ちず。遠山を望めば、

心も消え入らんばかり懐し」



同二十六日——夜十時記す「屋外は風雨の声ものすごし。滴声相応ず。今日は終日霧たちこめて野や林や永久とこしえの夢に入りたらんごとく。午後犬を伴うて散歩す。林に入り黙坐す。犬眠る。水流林より出でて林に入る、落葉を浮かべて流る。おりおり時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静かなり」

同二十七日——「昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うららかに昇りぬ。屋後の丘に立ちて望めば富士山真白ろに連山の上に聳そびゆ。風清く気澄めり。

げに初冬の朝なるかな。

田面たおもに水あふれ、林影倒さかしまに映れり」

十二月二日——「今朝霜、雪のごとく朝日にきらめきてみごととなり。しばらくして薄雲かかり日光寒し」

同○二○二○日——「雪初めて降る」

三○十○年○一○月○十○三○日——「夜更けぬ。風死し林黙す。雪しきりに降る。燈をかかげて戸外をうかがう、降雪火影にきらめきて舞う。ああ武蔵野沈黙す。しかも耳を澄ませば遠きかなた

の林をわたる風の音す、はたして風声か」  
同○十○四○日——「今朝大雪、葡萄ぶどう棚だな墮おちぬ。

夜更けぬ。梢をわたる風の音遠く聞こゆ、ああこれ武蔵野の林より林をわたる冬の夜寒よさむの凜こがらしなるかな。雪どけの滴声軒をめぐる」

同○二○十○日——「美しき朝。空は片雲なく、地は霜柱白銀のごとくきらめく。小鳥梢に囀さえずず。梢頭しやうとう針のごとし」

二○月○八○日——「梅咲きぬ。月ようやく美なり」

三○月○十○三○日——「夜十二時、月傾き風きゆうに、雲わき、林

鳴る」

同○二○一○日——「夜十一時。屋外の風声をきく、たちまち遠くたちまち近し。春や襲いし、冬や遁れし」

## 三

昔の武蔵野は萱原かやはらのはてなき光景をもつて絶類の美を鳴らしていたようにいい伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林はじつに今の武蔵野の特色といつてもよい。すなわち木はおもになら檜たぐの類いで冬はことごとく落葉し、春は滴したたるばかりの新緑萌もえ出でずるその変化が秩父嶺以東十数里の野いつせいにかすみ行なわれて、春夏秋冬を通じ霞かすみに雨に月に風に霧に時雨しぐれに雪に、緑蔭に紅葉に、さまざまの光景を呈ていするその妙はちよつと西国地方また東

北の者には解しかねるのである。元来日本人はこれまで櫛の類いの落葉林の美をあまり知らなかつたようである。林といえはおもに松林のみが日本の文学美術の上に認められていて、歌にも櫛林の奥で時雨を聞くというようなことは見あたらぬ。自分も西国に人となつて少年の時学生として初めて東京に上つてから十年になるが、かかる落葉林の美を解するに至つたのは近來のことで、それも左の文章がおおいに自分を教えたのである。

「秋九月中旬というころ、一日自分が櫛かばの林の中に座していたことがあつた。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生なま暖かな日かげも射してまことに気まぐれな空合そらあい。あわあわしい白しろら雲そが空そら一面に棚引たなびくかと思つと、フトまたあちこち瞬またたく間雲切れがして、むりに押し分けたような雲間から澄みて伶俐さかし気げにみえる人の眼のごとくに朗らかな

に晴れた蒼空あおぞらがのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上でかすかに戦そよいだが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する、おもしろそうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒舌しやべりでもなかつたが、ただようやく聞取れるか聞取れぬほどのしめやかな私語わたくしごの声であつた。そよ吹く風は忍ぶように木末こずえを伝ツた、照ると曇るとで雨にじめつく林の中のようにすが間断なく移り変わった、あるいはそこにありとある物すべて一時に微笑したように、隈くまなくあかみわたつて、さのみ繁しげくもない樺かばのほそぼそとした幹みきは思いがけずも白絹めく、やさしい光沢こうたくを帯おび、地上に散り布しいた、細かな落ち葉はにわかになりに日に映じてまばゆきま

でに金色を放ち、頭をかきむしツたような『ペアポロトニク』  
(蕨わらびの類たぐい)のみごとくきな茎、しかも熟つえすぎた葡萄ぶどうめく色を帯  
びたのが、際限もなくもつれからみつして目前に透かして見  
られた。

あるいはまたあたり一面にわかまたたに薄暗くなりだして、瞬またたく  
間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積つつたま  
までまた日の眼に逢あわぬ雪のように、白くおぼろに霞かむ——  
と小雨が忍しのびやかに、怪あやし気に、私語するようにバラバラと  
降ふツて通とツた。樺の木の葉はいちじるしく光沢が褪さめてもさ  
すがになお青かツた、がただそちこちに立つ稚木のみはすべ  
て赤くも黄いろくも色づいて、おりおり日の光りが今ま雨に  
濡ぬれたばかりの細枝の繁もみを漏もれて滑りながらに脱ぬけてくる  
のをあびては、キラキラときらめいた」

すなわちこれはツルゲーネフの書きたるものを二葉亭が訳して「あいびき」と題した短編の冒頭ぼうとうにある一節であつて、自分がかかる落葉林の趣きを解するに至つたのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これはロシアの景でしかも林は樺の木で、武蔵野の林は榎の木、植物帯からいふとはなはだ異なつてゐるが落葉林の趣は同じことである。自分はしばしば思つた、もし武蔵野の林が榎たぐの類いでなく、松か何かであつたらきわめて平凡な変化に乏しい色彩しきさいいちようなものとなつてしまふちんちようまで珍重するに足らないだらうと。

榎こがらしの類いだから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨しぐれが私語ささやく。凧こがらしが叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かのごとく遠く飛び去る。木の葉落ちつくせば、数十里の方域にわたる林が一時に裸体はだかになつて、

蒼あおずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空気がいちだん澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞こえる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睥視ていしし、黙想すと書いた。「あいびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くといふことがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心に適かなっているだろう。秋ならば林のうちより起こる音、冬ならば林のかなた遠く響く音。

鳥の羽音、囀さえずる声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声。叢くさむらの蔭、林の奥にすだく虫の音。空車荷車の林を廻めぐり、坂を下り、野路のじを横ぎる響。蹄ひづめで落葉を蹶散けちらす音、これは騎兵演習の斥候せつこうか、さなくば夫婦連れで遠乗りに出かけた外国人である。何事をか声高こわだかに話しながらゆく村の者のだみ声、それもいつし



か、遠ざかりゆく。独り淋しそうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲声。隣おとこなの林でだしぬけに起こる銃音つつおと。自分が一度犬をつれ、近処おとこなの林を訪い、切株に腰をかけて書ほんを読んでいると、突然林の奥で物の落ちたような音がした。足もとに臥ねていた犬が耳を立ててきつとそのほうを見つめた。それぎりであつた。たぶん栗が落ちたのであろう、武蔵野には栗樹くりのきもずいぶん多いから。もしそれ時雨しぐれの音に至つてはこれほど幽寂ゆうじやくのものはない。山家の時雨は我国でも和歌の題にまでなつているが、広い、広い、野末から野末へと林を越え、杜もりを越え、田を横ぎり、また林を越えて、しのびやかに通り過ゆく時雨の音のいかにも幽しずかで、また鷹揚おうような趣おもむきがあつて、優やさしく懐ゆかしいのは、じつに武蔵野の時雨の特色であらう。自分がかつて北海道の深林で時雨に逢つたことがある、これはまた人跡絶無の大森林であるからその趣は

さらに深いが、その代り、武蔵野の時雨しぐれのさらに人なつかしく、私語ささやくがごとき趣はない。

秋の中ごろから冬の初め、試みに中野あたり、あるいは渋谷、世田ヶ谷、または小金井の奥の林を訪おとうて、しばらく座つて散歩の疲れを休めてみよ。これらの物音、たちまち起こり、たちまち止み、しだいに近づき、しだいに遠ざかり、頭上せいしょうの木の葉風なきに落ちてかすかな音をし、それも止んだ時、自然の静蕭せいしょうを感じ、永遠エタルニテの呼吸身に迫るを覚ゆるであろう。武蔵野の冬の夜更けて星斗せいとらんかん闌干たる時、星をも吹き落としそうな野分のわきがすさまじく林をわたる音を、自分はしばしば日記に書いた。風の音は人の思いを遠くに誘う。自分はこのもの凄すこい風の音のたちまち近くたちまち遠きを聞きては、遠い昔からの武蔵野の生活を思いつづけたこともある。

熊谷直好の和歌に、

よもすから木葉かたよる音きけは

しのひに風のかよふなりけり

というがあれど、自分は山家の生活を知っていながら、この歌の心をげにもと感じたのは、じつに武蔵野の冬の村居の時であった。

林に座っていて日の光のもつとも美しさを感じるのは、春の末より夏の初めであるが、それは今ここには書くべきでない。

その次は黄葉の季節である。なかば黄いろくなかば緑な林の中に歩いていると、澄みわたった大空が梢々の隙間からのぞかれて日の光は風に動く葉末葉末に碎け、その美しさいつくされず。日光とか碓氷とか、天下の名所はともかく、武蔵野のような広い平原の林が隈なく染まつて、日の西に傾くとともに一面

の火花を放つというも特異の美観ではあるまいか。もし高きに登りて一目にこの大観を占めることができたらこの上もないこと、よしそれができたいにせよ、平原の景の単調なるだけに、人をしてその一部を見て全部の広い、ほとんど限りない光景を想像さずるものである。その想像に動かされつつ夕照に向かつて黄葉の中を歩けるだけ歩くことがどんなにおもしろからう。林が尽きると野に出る。

## 四

十月二十五日の記に、野を歩み林を訪うと書き、また十一月初四日の記には、夕暮に独り風吹く野に立てばと書いてある。そこで自分は今一度ツルゲーネフを引く。

「自分はたちどまつた、花束を拾い上げた、そして林を去つて、のらへ出た。日は青々とした空に低く漂ただよつて、射す影も蒼ざめて冷やかになり、照るとはなくただジミな水色のぼかしを見るように四方に充みちわたつた。日没にはまだ半時間もあるうに、モウゆうやけがほの赤く天末を染めだした。黄いろくからびた刈かり株かぶをわたつて烈しく吹きつける野分に催されて、そりかえつた細かな落ち葉があわただしく起き上がり、林に沿うた往来を横よぎつて、自分の側を駈かけ通つた、のらに向かつて壁のようにたつ林の一面はすべてざわざわざわつき、細末の玉の屑くずを散らしたように煌きらきはしないがちらついていた。また枯くれ草さ、莠はぐ、藁わらの嫌きらいなくそこら一面にからみついた蜘蛛くもの巣は風に吹き靡なびかされて波たつていた。

自分はたちどまつた……心細くなつてきた、眼まなこに遮おる物象

はサツパリとはしていれど、おもしろ気もおかし気もなく、さびれはてたうちにも、どうやら間近になつた冬のすさまじさが見透かされるように思われて。小心な鴉からすが重そうに羽ばたきをして、烈しく風を切りながら、頭上を高く飛び過ぎたが、フト首を回めぐらして、横目で自分をにらめて、きゆうに飛び上がつて、声をちぎるように啼なきわたりながら、林の向うへかくれてしまつた。鳩はとが幾羽ともなく群をなして勢いこんで穀倉のほうから飛んできた、がフト柱を建てたように舞い昇つて、さてパツといつせいに野面に散つた——アア秋だ！誰だか禿山はげやまの向うを通るとみえて、から車の音が虚空こくうに響きわたつた……」

これはロシアの野であるが、我武蔵野の野の秋から冬へかけの光景も、およそこんなものである。武蔵野にはけつして禿

山はない。しかし大洋のうねりのように高低起伏している。それも外見には一面の平原のようで、むしろ高台のところどころが低く窪くぼんで小さな浅い谷をなしているといったほうが適當であろう。この谷の底はたいがい水田である。畑はおもに高台にある、高台は林と畑とでさまざまの区劃をなしている。畑はすなわち野である。されば林とても数里にわたるものなく否いな、おそらく一里にわたるものもあるまい、畑とても一眸いちぼう数里に続くものはなく一座の林の周囲は畑、一頃いっけいの畑の三方は林、というような具合で、農家がその間に散在してさらにこれを分割している。すなわち野やら林やら、ただ乱雑に入組んでいて、たちまち林に入るかと思えば、たちまち野に出るといような風である。それがまたじつに武蔵野に一種の特色を与えていて、ここに自然あり、ここに生活あり、北海道のような自然そのまま

の大原野大森林とは異なっていて、その趣も特異である。

稲の熟するころとなると、谷々の水田が黄ばんでくる。稲が刈り取られて林の影が倒さかさに田面に映るころとなると、大根畑の盛りで、大根がそろそろ抜かれて、あちらこちらの水溜みずためまたは小さな流れのほとりで洗われるようになる。野は麦の新芽で青々となつてくる。あるいは麦畑の一端、野原のままに残り、尾花野菊が風に吹かれている。萱原かやはらの一端がしだいに高まつて、そのはてが天ぎわをかぎつていて、そこへ爪先つまさきあがりに登つてみると、林の絶え間を国境に連なる秩父ちちぶの諸嶺が黒く横たわつていて、あたかも地平線を走つてはまた地平線下に没しているようにもみえる。さてこれよりまた畑のほうへ下るべきか。あるいは畑のかなたの萱原に身を横たえ、強く吹く北風を、積み重ねた枯草で避よけながら、南の空をめぐる日の微温ぬるき光に顔



をさらして畑の横の林が風にざわつき煌<sup>きらめ</sup>き輝くのを眺むべきか。あるいはまたただちにかの林へとゆく路をすすむべきか。自分  
はかくためらったことがしばしばある。自分は困ったか否<sup>いな</sup>、けつ  
して困らない。自分は武蔵野を縦横に通じている路は、どれを  
撰<sup>えら</sup>んでいっても自分を失望ささないことを久しく経験して知っ  
ているから。

## 五

自分の朋友がかつてその郷里から寄せた手紙の中に「この間  
も一人夕方に萱原を歩みて考え申<sup>まうろう</sup>候、この野の中に縦横に通ぜ  
る十数の径<sup>みち</sup>の上を何百年の昔よりこのかた朝の露さやけしとい  
いては出で夕の雲花やかなりと書いてはあこがれ何百人のあわ

れ知る人や逍遙しょうようしつらん相悪にくむ人は相避けて異なる道をへだたりていき相愛する人は相合して同じ道を手に手とりつつかえりつらん」との一節があつた。野原の径を歩みてはかかるいみじき想いも起こるならんが、武蔵野の路はこれとは異り、相逢わんとて往くとても逢いそこね、相避けんとして歩むも林の回り角で突然出逢うことがある。されば路という路、右にめぐり左に転じ、林を貫き、野を横ぎり、真直まっすぐなること鉄道線路のごときかと思えば、東よりすすみてまた東にかえるような迂回うかいの路もあり、林にかくれ、谷にかくれ、野に現われ、また林にかくれ、野原の路のようによく遠くの別路ゆく人影を見ることが容易でない。しかし野原の径の想いにもまして、武蔵野の路にはいみじき実じつがある。

武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない。

どの路でも足の向くほうへゆけばかならずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武蔵野の美はただその縦横に通ずる数千条の路を当あてもなく歩くことによつて始めて獲えられる。春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただこの路をぶらぶら歩いて思いつきしだいに右し左すれば随ずい処しよに吾らを満足さするものがある。これがじつにまた、武蔵野第一の特色だろうと自分ほしみじみ感じている。武蔵野を除いて日本にこのような処がどこにあるか。北海道の原野にはむろんのこと、奈須野にもない、そのほかどこにあるか。林と野とがかくもよく入り乱れて、生活と自然とがこのように密接している処がどこにあるか。じつに武蔵野にかかる特殊の路のあるのはこのゆえである。

されば君もし、一の小径を往き、たちまち三条に分かるる処

に出たなら困るに及ばない、君の杖を立ててその倒れたほうに  
往きたまえ。あるいはその路が君を小さな林に導く。林の中ご  
ろに到つてまた二つに分かれたら、その小なる路を撰んでみた  
まえ。あるいはその路が君を妙な処に導く。これは林の奥の古  
い墓地で苔むす墓が四つ五つ並んでその前にすこしばかりの空  
地があつて、その横のほうに女郎花など咲いていることもある  
う。頭の上の梢で小鳥が鳴いていたら君の幸福である。すぐ引  
きかえして左の路を進んでみたまえ。たちまち林が尽きて君の  
前に見わたしの広い野が開ける。足元からすこしだらだら下が  
りになり萱が一面に生え、尾花の末が日に光っている、萱原の  
先きが畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠  
い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集まっていて雲  
の色にまがいそうな連山がその間にすこしずつ見える。十月小

春の日の光のどかに照り、小気味よい風がそよそよと吹く。もし萱原のほうへ下りてゆくと、今まで見えた広い景色がことごとく隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだろう。思いがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れていたのを発見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の断片を鮮かに映している。水のほとりには枯蘆かれあしがすこしばかり生えている。この池のほとりの径みちをしばらくゆくとまた二つに分かれる。右にゆけば林、左にゆけば坂。君はかならず坂をのぼるだろう。とかく武蔵野を散歩するのは高い処高い処と撰びたくなるのはなんとかして広い眺望を求むるからで、それでその望みは容易に達せられない。見下ろすような眺望はけつしてできない。それは初めからあきらめたがいい。

もし君、何かの必要で道を尋ねたく思わば、畑の真中にある

農夫にききたまえ。農夫が四十以上の人であつたら、大声をあげて尋ねてみたまえ、驚いてこちらを向き、大声で教えてくれるだろう。もし少女おとめであつたら近づいて小声でききたまえ。もし若者であつたら、帽を取つて慇懃いんぎんに問いたまえ。鷹揚おうように教えてくれるだろう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖くせであるから。

教えられた道をゆくと、道がまた二つに分かれる。教えてくれたほうの道はあまりに小さくてすこし変だと思つてもそのとおりにゆきたまえ、突然農家の庭先に出るだろう。はたして変だと驚いてはいけぬ。その時農家で尋ねてみたまえ、門を出るとすぐ往来ですよと、すげなく答えるだろう。農家の門を外に出してみるとはたして見覚えある往来、なるほどこれが近路ちかみちだなと君は思わず微笑をもらす、その時初めて教えてくれた道のあ

りがたさが解るわかだらう。

真直まっすぐな路で両側とも十分に黄葉した林が四五丁も続く処に出ることがある。この路を独り静かに歩むことのどんなに楽しからう。右側の林の頂いただきは夕照あざや鮮かにかがやいている。おりおり落葉の音が聞こえるばかり、あたりはしんとしていかにも淋しい。前にも後ろにも人影見えず、誰にも遇あわず。もしそれが木葉落ちつくしたところならば、路は落葉に埋れて、一足ごとにながさがさと音がする、林は奥まで見すかされ、梢の先は針のごとく細く蒼空あおぞらを指している。なおさら人に遇わない。いよいよ淋しい。落葉をふむ自分の足音ばかり高く、時に一羽の山鳩あわただしく飛び去る羽音に驚かされるばかり。

同じ路を引きかえして帰るは愚ぐである。迷ったところが今の武蔵野にすぎない、まさかに行暮れて困ることもあるまい。帰

りもやはりおよその方角をきめて、べつな路を当てもなく歩くが妙。そうすると思わず落日の美観をうることがある。日は富士の背に落ちんとしていまだまつたく落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染まつて、見るがうちにさまざまの形に変わる。連山の頂は白銀の鎖くさりのような雪がしだいに遠く北に走つて、終は暗憺あんたんたる雲のうちに没してしまふ。

日が落ちる、野は風が強く吹く、林は鳴る、武蔵野は暮れんとする、寒さが身に沁しむ、その時は路をいそぎたまえ、顧みて思わず新月が枯木の梢の横に寒い光を放っているのを見る。風が今にも梢から月を吹き落としそうである。突然また野に出る。君はその時、

山は暮れ野は黄昏たそがれの薄すすきかな

の名句を思いだすだろう。



今より三年前の夏のことであつた。自分はある友と市中の寓居ぐうきよを出でて三崎町の停車場から境まで乗り、そこで下りて北へ真直まっすぐに四五丁ゆくと桜橋という小さな橋がある、それを渡ると一軒の掛茶屋かけぢややがある、この茶屋の婆さんが自分に向かつて、「今時分、何にしに來ただア」と問うたことがあつた。

自分は友と顔見あわせて笑つて、「散歩に來たのよ、ただ遊あそびに來たのだ」と答えると、婆さんも笑つて、それもばかにしたような笑いかたで、「桜は春咲くこと知らねえだね」といつた。そこで自分は夏の郊外の散歩のどんなにおもしろいかを婆さんの耳にも解るように話してみたがむだであつた。東京の人

はのんきだという一語で消されてしまった。自分らは汗をふきふき、婆さんが剥むいてくれる甜瓜まくわうりを喰い、茶屋の横を流れる幅一尺ばかりの小さな溝で顔を洗いなどして、そこを立ち出でた。この溝の水はたぶん、小金井の水道から引いたものらしく、よく澄んでいて、青草の間を、さも心地よさそうに流れて、おりおりこぼこぼと鳴っては小鳥が来て翼をひたし、喉のどを湿うるおすのを待っているらしい。しかし婆さんは何とも思わないでこの水で朝夕、鍋釜なべかまを洗うようであった。

茶屋を出て、自分らは、そろそろ小金井の堤を、水上のほうへとのぼり初めた。ああその日の散歩がどんなに楽しかったろう。なるほど小金井は桜の名所、それで夏の盛りにその堤をこのこ歩くもよそ目には愚おろかにみえるだろう、しかしそれはいまだ今の武蔵野の夏の日の光を知らぬ人の話である。

空は蒸暑い雲が湧きいでて、雲の奥に雲が隠れ、雲と雲との間の底に蒼空が現われ、雲の蒼空に接する処は白銀の色とも雪の色とも譬えがたき純白な透明な、それで何となく穏やかな淡々しい色を帯びている、そこで蒼空が一段と奥深く青々と見える。ただこれぎりなら夏らしくもないが、さて一種の濁った色の霞のようなものが、雲と雲との間をかき乱して、すべての空の模様を動揺、参差、任放、錯雑のありさまとなし、雲を劈く光線と雲より放つ陰翳とが彼方此方に交叉して、不羈奔逸の気がいずこともなく空中に微動している。林という林、梢という梢、草葉の末に至るまでが、光と熱とに溶けて、まどろんで、怠けて、うつらうつらとして酔っている。林の一角、直線に断たれてその間から広い野が見える、野良一面、糸遊上騰して永くは見つめていられない。

自分らは汗をふきながら、大空を仰いだり、林の奥をのぞいたり、天ぎわの空、林に接するあたりを眺めたりして堤の上を喘ぎ喘ぎ辿つてゆく。苦しいか？ どうして！ 身うちには健康がみちあふれている。

長堤三里の間、ほとんど人影を見ない。農家の庭先、あるいは藪の間から突然、犬が現われて、自分らを怪しそうに見て、そしてあくびをして隠れてしまう。林のかなたでは高く羽ばたきをして雄鶏おんどりが時をつくる、それが米倉の壁や杉の森や林や藪こもに籠つて、ほがらかに聞こえる。堤の上にも家鶏にわとりの群が幾組となく桜の陰などに遊んでいる。水上を遠く眺めると、一直線に流れてくる水道の末は銀粉を撒いたような一種の陰影のうちに消え、間近くなるにつれてぎらぎら輝いて矢のごとく走つてくる。自分たちはある橋の上に立つて、流れの上と流れのすそと

見比べていた。光線の具合で流れの趣が絶えず変化している。水上が突然薄暗くなるかとみると、雲の影が流れとともに、瞬またたく間に走つてきて自分たちの上まで来て、ふと止まつて、きゆうに横にそれてしまうことがある。しばらくすると水上がまばゆく煌かがやいてきて、両側の林、堤上の桜、あたかも雨後の春草のように鮮かに緑の光を放つてくる。橋の下では何ともいいようなない優しい水音がする。これは水が両岸に激して発するのでなく、また浅瀬のような音でもない。たつぷりと水量みずかさがあつて、それで粘土質のほとんど壁を塗つたような深い溝を流れるので、水と水とがもつれてからまつて、揉もみあつて、みずから音を発するのである。何たる人なつかしい音だろう！

〃——Let us match

This water's pleasant tune

With some old Border song, or catch,

That suits a summer's noon.~

の句も思ひだされて、七十二歳の翁と少年とが、そこら桜の木  
蔭にでも坐つていないだらうかと思廻わしたくなる。自分はこ  
の流れの両側に散点する農家の者を幸福しやわせの人々と思つた。むろ  
ん、この堤の上を麦藁帽子むぎわらぼうしとステッキ一本で散歩する自分たち  
をも。

七

自分といつしよに小金井の堤を散歩した朋友は、今は判官に  
なつて地方に行つてゐるが、自分の前号の文を読んで次のごと  
くに書いて送つてきた。自分は便利のためにこれをここに引用

する必要を感じず——武蔵野は俗にいう関八州かんぱっしゅうの平野でもない。また道灌どうかんが傘かさの代りに山吹やまぶきの花を貰ったという歴史的原でもない。僕は自分で限界を定めた一種の武蔵野を有している。その限界はあたかも国境または村境が山や河や、あるいは古跡や、いろいろのもので、定めらるるようにおのずから定められたもので、その定めは次のいろいろの考えから来る。

僕の武蔵野の範囲の中には東京がある。しかしこれはむろん省はぶかなくてはならぬ、なぜならば我々は農商務省かんがの官衙ぎやが巍峨ぎがとして聳そびえていたり、鉄管事件てつかんじけんの裁判があつたりする八百八街によつて昔の面影を想像することができない。それに僕が近ごろ知合いになつたドイツ婦人の評に、東京は「新しい都」ということがあつて、今日の光景ではたとえ徳川の江戸であつたにしろ、この評語を適当と考えられる筋もある。このようなわけ

で東京はかならず武蔵野から抹殺せねばならぬ。

しかしその市の尽くる処、すなわち町外ずればかならず抹殺してはならぬ。僕が考えには武蔵野の詩趣を描くにはかならずこの町外れを一の題目とせねばならぬと思う。たとえば君が住まわれた渋谷の道玄坂の近傍、目黒の行人坂、また君と僕と散歩したことの多い早稲田の鬼子母神あたりの町、新宿、白金……

また武蔵野の味を知るにはその野から富士山、秩父山脈国府台等を眺めた考えのみでなく、またその中央に包まれている首府東京をふり顧つた考えで眺めねばならぬ。そこで三里五里の外に出で平原を描くことの必要がある。君の一篇にも生活と自然とが密接しているということがあり、また時々いろいろなものに出あうおもしろ味が描いてあるが、いかにもさようだ。僕はかつてこういうことがある、家弟をつれて多摩川のほうへ遠足



したときに、一二里行き、また半里行きて家並やなみがあり、また家並に離れ、また家並に出て、人や動物に接し、また草木てんてつばかりになる、この変化のあるのでところどころに生活を点綴している趣味のおもしろいことを感じて話したことがあつた。この趣味を描くために武蔵野に散在せる駅、駅といかぬまでも家並、すなわち製図家の熟語でいう聯檐家屋れんたんかおくを描写するの必要がある。

また多摩川はどうしても武蔵野の範囲に入れなければならぬ。六つ玉川などと我々の先祖が名づけたことがあるが武蔵の多摩川のような川が、ほかにどこにあるか。その川が平らな田と低い林とに連接する処の趣味は、あだかも首府が郊外と連接する処の趣味とともに無限の意義がある。

また東のほうの平面を考えられよ。これはあまりに開けて水田が多くて地平線がすこし低いゆえ、除外せられそうなれどや

はり武蔵野に相違ない。亀井戸かめいどの金糸堀きんしほりのあたりから木下川きねがわへん辺へかけて、水田と立木と茅屋ぼうおくとが趣をなしているぐあいには武蔵野のいちりようふん一領分である。ことに富士でわかる。富士を高く見せてあだかも我々が逗子ずしの「あぶずり」で眺むるように見せるのはこの辺にかぎる。また筑波つくばでわかる。筑波の影が低く遥はるかなるを見ると我々は関八州かんの一隅に武蔵野が呼吸している意味を感じる。

しかし東京の南北にかけては武蔵野の領分がはなはだせまい。ほとんどないといってもよい。これは地勢ちせいのしからしむるところで、かつ鉄道が通じているので、すなわち「東京」がこの線路によって武蔵野を貫いて直接に他の範囲と接続しているからである。僕はどうもそう感じる。

そこで僕は武蔵野はまず雑司谷ぞうしがやから起こって線を引いてみる

と、それから板橋の中仙道の西側を通つて川越近傍まで達し、君の一編に示された入間郡を包んでまる円く甲武線の立川駅に来る。この範囲の間に所沢、田無などという駅がどんなに趣味が多いか……ことに夏の緑の深いころは。さて立川からは多摩川を限界として上丸辺まで下る。八王子はけつして武蔵野には入れられない。そして丸子からまるこ下目黒しもめぐろに返る。この範囲の間に布田、登戸、二子などのどんなに趣味が多いか。以上は西半面。

東の半面は亀井戸辺より小松川へかけ木下川から堀切を包んで千住近傍へ到つて止まる。この範囲は異論があれば取除いてもよい。しかし一種の趣味があつて武蔵野に相違ないことは前に申したとおりである——

自分は以上の所説にすこしの異存もない。ことに東京市の町外まちはすれを題目とせよとの注意はすこぶる同意であつて、自分もかねて思いついていたことである。町外はずれを「武蔵野」の一部に入れるといえ、すこしおかしく聞こえるが、じつは不思議はないので、海を描くに波打ちぎわを描くも同じことである。しかし自分はこれを後廻わしにして、小金井堤上の散歩に引きつづき、まず今の武蔵野の水流を説くことにした。

第一は多摩川、第二は隅田川、むろんこの二流のことは十分に書いてみたいが、さてこれも後廻わしにして、さらに武蔵野を流るる水流を求めてみたい。

小金井の流れのごとき、その一である。この流れは東京近郊に及んでは千駄ヶ谷、代々木、角筈つのはすなどの諸村の間を流れて新

宿に入り四谷上水となる。また井頭池いのかしらいけ善福池などより流れ出でて神田上水かんだじょうすいとなるもの。目黒辺かなすぎを流れて品海ひんかいに入るもの。渋谷辺を流れて金杉かなすぎに出ずるもの。その他名も知れぬ細流小溝さいりゅうしょうきよに至るまで、もしこれをよそで見ると格別の妙もなければ、これが今の武蔵野の平地高台の嫌もなく、林をくぐり、野を横切り、隠れかくつ現われつして、しかも曲まがりくねって（小金井は取除け）流るる趣おもむきは春夏秋冬に通じて吾らの心を惹ひくに足るものがある。自分はもと山多き地方せいちように生長したので、河といえはぶいぶん大きな河でもその水は透明であるのを見慣れたせい、初めは武蔵野の流れ、多摩川を除のぞいては、ことごとく濁っているのではなはだ不快な感を惹ひいたものであるが、だんだん慣れてみると、やはりこのすこし濁った流れが平原の景色に適かなつてみえるように思われてきた。

自分が一度、今より四五年前の夏の夜の事であった、かの友と相携たずさえて近郊を散歩したことを憶えている。神田上水の上流の橋の一つを、夜の八時ごろ通りかかった。この夜は月冴さえて風清く、野も林も白紗はくしやにつつまれしようにて、何ともいいがたき良夜りようやであった。かの橋の上には村のもの四五人集まっていた、欄らんに倚よつて何事をか語り何事をか笑い、何事をか歌っていた。その中に一人の老翁ろうおうがまざっていた、しきりに若い者の話や歌をまぜツかえしていた。月はさやかに照り、これらの光景を朦朧もうろうたる楕円形だえんけいのうちに描きだして、田園詩の一節のように浮かべている。自分たちもこの画中の人に加わつて欄に倚つて月を眺めていると、月は緩ゆるるやかに流るる水面に澄んで映っている。羽虫はむしが水を搏うつごとに細紋起きてしばらく月の面おもに小皺こじわがよるばかり。流れは林の間をくねつて出てきたり、また林の間に半

円を描いて隠れてしまう。林の梢に砕けた月の光が薄暗い水に落ちてきらめいて見える。水蒸気は流れの上、四五尺の処をかすめている。

大根の時節に、近郊を散歩すると、これらの細流のほとり、いたるところで、農夫が大根の土を洗っているのを見る。

## 九

かならずしも道玄坂どうげんざかといわず、また白金しろがねといわず、つまり東

京市街の一端、あるいは甲州街道となり、あるいは青梅道おうめみちとな

り、あるいは中原道なかはらみちとなり、あるいは世田ヶ谷街道となりて、郊

外の林地田圃りんちでんぼに突入する処の、市街ともつかず宿駅しゆくえきともつかず、

一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈しおる場

処を描写することが、すこぶる自分の詩興を喚び起こすも妙ではないか。なぜかような場処が我らの感を惹くだらうか。自分は一言にして答えることができる。すなわちこのような町外れの光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思いをなさしむるからである。言葉を換えていえば、田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるような物語、小さな物語、しかも哀れの深い物語、あるいは抱腹するような物語が二つ三つそこらの軒先に隠れていそうに思われるからであろう。さらにその特点をいえば、大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とがここで落ちあつて、緩やかにうずを巻いているようにも思われる。

見たまえ、そこに片眼の犬が蹲っている。この犬の名の通っているかぎりがすなわちこの町外れの領分である。



見たまえ、そこに小さな料理屋がある。泣くのととも笑うのと  
も分からぬ声を振立ててわめく、女の影法師が障子しょうじに映っている。  
外は夕闇がこめて、煙の臭いにおとも土の臭いともわかちがたき香  
りが淀よどんでいる。大八車が二台三台と続いて通る、その空車からぐるまの  
轍わだちの響やかまが喧しく起こりては絶え、絶えては起こりしている。

見たまえ、鍛冶工かじやの前に二頭の駄馬が立っているその黒い影  
の横のほうで二三人の男が何事をかひそひそと話しあっている  
のを。鉄蹄てつていの真赤になつたのが鉄砧かねしきの上に置かれ、火花が夕闇  
を破つて往来の中ほどまで飛んだ。話していた人々がどつと何  
事をか笑つた。月が家並やなみの後ろの高い檜かしのの梢まで昇ると、向う  
片側の家根が白しろろんできた。

か、ん、て、ら、か、ら、黒い油煙ゆえんが立っている、その間を村の者町の者  
十数人駆け廻わつてわめいて、いろいろの野菜が彼方此方

に積んで並べてある。これが小さな野菜市、小さな糶売場である。

日が暮れるとすぐ寝てしまう家があるかと思うと夜の二時ごろまで店の障子に火影を映している家がある。理髮所の裏が百姓家で、牛のうなる声が往来まで聞こえる、酒屋の隣家が納豆売の老爺の住家で、毎朝早く納豆納豆と嗶声で呼んで都のほうへ向かって出かける。夏の短夜が間もなく明けると、もう荷車が通りはじめる。ごろごろがたがた絶え間がない。九時十時となると、蟬が往来から見える高い梢で鳴きだす、だんだん暑くなる。砂埃が馬の蹄、車の轍に煽られて虚空に舞い上がる。蠅の群が往来を横ぎって家から家、馬から馬へ飛んであるく。それでも十二時のどんがかすかに聞こえて、どことなく都の空のかなたで汽笛の響がする。

後註

一

「だらうか」はママ



底本：「日本文学全集 12 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和 42）年 9 月 7 日初版

1972（昭和 47）年 9 月 10 日 9 版

底本の親本：「国木田独歩全集」学習研究社

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：八卷美恵

1998 年 10 月 21 日公開

2004 年 6 月 17 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。